

大学等名 帯広畜産大学  
 テーマ名 テーマ5：人材交流による産学連携教育  
 取組名称 国際貢献を担う人材育成のための連携教育  
 取組学部等 畜産学部  
 取組担当者 教授 高橋 潤一  
 取組期間 平成17年度～平成18年度  
 Webサイト <http://www.obihiro.ac.jp/~gp/index.php>

## 取組の概要

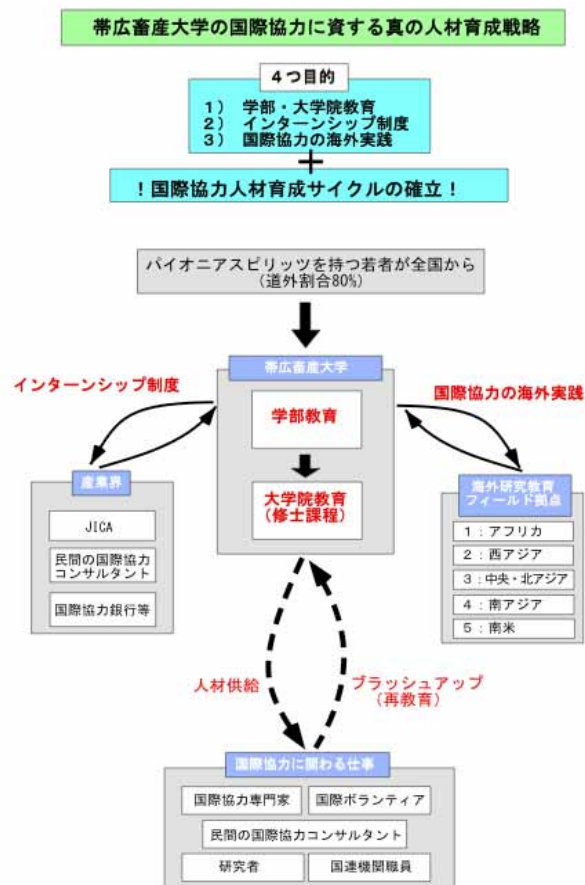
国際貢献を担う人材育成のための連携教育のために、1) 学部・大学院教育、2) インターンシップ制度、3) 国際協力の海外実践の3つの教育・研究を中心に行う。

学部・大学院教育は、平成18年度新設「国際畜産協力ユニット」の教育制度、およびシラバスに従って行う。大学での当該教育によって、開発途上国の社会発展に寄与できる基礎を修得させる。

インターンシップ制度では、学生をJICAや国連機関等へ派遣し、国際協力に関わる事務を国内体験させ、当該分野の実践的技術教育を行う。

国際協力の海外実践は、本大学が海外研究教育フィールドで組織・運営する国際協力プロジェクトに学生を引率し、海外の実践の場で国際協力に携わらせることにより行う。

いずれの教育活動も食品安全科学(特に畜産開発と環境保全)を共通テーマにし、専門教育と国内外実践に裏付けされた国際専門職業人を育成するための基盤作りを促進することにある。



## 実施の経緯・過程

本プログラムの実施にあたっては、新たに専門科目の授業を行う「畜産国際協力ユニット」を立ち上げた。

平成17年度においては、「畜産国際協力ユニット」を立ち上げるための準備として、カリキュラムの作成及び語学関係、国際協力関係の図書を整備し、学生の知識の充実に努めた。また、海外拠点形成のため東南アジア、中央アジア、アフリカ、南アメリカで調査を実施し拠点形成の可能性を探った。

既存の畜産科学科に所属する9ユニットから国際協力に関心の高い希望者を募り、9人が所属することとなった。平成18年2月には、評価委員会、国際協力フォーラムを開催し、「畜産国際協力ユニット」所属予定の学生が積極的に運営の補助を行い、英語で行われた評価委員会及び国際協力フォーラムに対して語学の重要性を認識した。また、JICAとの連携で「短期海外派遣ボランティア」

を実施し、夏季休業中に学生10人、春季休業中に学生4人をフィリピンの酪農強化プロジェクトに派遣し、高い評価を得た。

「畜産国際協力ユニット」に所属する学生は、2年次まではもちろん、3年次以降も副ユニットである既存9ユニットの1つに所属してそれぞれの専門の分野で学習し、それに加えて展開教育科目である国際協力関係科目を履修した。

カリキュラムについては、基盤教育科目として「スペイン語入門」、「実用スペイン語」、共通教育科目として「国際比較畜産論」を新規に開講した。共通教育科目の「国際農業開発協力論」は、JICA連携により、非常勤講師による充実を図った。

専門科目である展開科目は、「国際協力ディベート論」、「国際協力インターンシップ」、「海外実習」、「国際協力研修実習」を取り入れて国際貢献のための実習科目を多く設けた。

平成18年度においては、「畜産国際協力ユニット」が本格的に立ち上がり、9人の所属学生が精力的に展開科目を中心として学習に励んだ。前期は「スペイン語入門」、「国際農業開発協力論」、「国際協力ディベート論」で学び、夏季休業中に国際協力を実践するため「国際協力インターンシップ」、「海外実習」を行った。初めての「海外実習」は、国際交流協定締結大学であるタイのマヒドン大学インターナショナルカレッジがコーディネートした実習を行い、貴重な体験もあり、学生の国際協力への動機づけとなるものであった。



「国際協力ディベート論」授業風景

後期は、「国際比較畜産論」、「国際協力研修実習」で更に国際貢献のための実践を積み、平成

19年3月に JICA 外国人留学生が参加する研修の運営実習を行い、国際協力についての実践を行った。このように、基礎となる既存の9ユニットの専門分野の上に国際協力を学ぶことによって、さまざまな農業・畜産分野と国際協力が連携した教育を受けることによって、広い分野での国際貢献ができる基礎を築いた。

また、8月から9月にかけて JICA「短期海外派遣ボランティア」の正式隊員として約6週間にわたり、フィリピンの酪農強化プロジェクトに6名が参加した。現地の酪農家に対して繁殖、飼料、予防のための助言をするなど、大いなる成果を挙げた。

#### 目的に対する成果、人材養成面での達成度

国際協力を目指す学生を主な対象に、専門的な教育に裏付けされた国際協力教育を実施している。従って、国際協力への進路を希望する者も、専門分野での一定の経験と更なる専門的知識の蓄積が必要となっている。実際に、協力隊を受験した学生も、保留という形であり、採用には至っていない。数名の学生は、将来的に国際協力あるいは国際社会での活躍を希望しており、副専攻分野関連に就職し経験を積むとの意思を示している。「畜産国際協力ユニット」関連の大学院が設置されない限り、学部以降の経験を得る機会は、現在の所、就職以外にない現状である。なお、就職に際し、同ユニットの教育を専攻したことにより、JICA 集団技術研修を受け入れている民間企業に採用された例もあり、他の学生に比べ優位であったとの報告もある。

## 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

新たに「畜産国際協力ユニット」を立ち上げ、それに伴い、基盤教育・共通教育科目の充実を図った。具体的には、基盤教育科目では世界で最も使用人口の多いスペイン語の開設、共通教育科目では「比較畜産国際論」を開設し、「畜産国際協力ユニット」所属の学生のみならず、希望する学生が受講できるようにした。

文部科学省が主催する現代GPフォーラムに積極的に参加し、ホームページも立ち上げた。また、国際協力フォーラムを2年続けて開催し、国際貢献を担う人材育成のための教育の情報発信に努めた。

地元新聞社を始めとして、全国紙、雑誌の取材も受け地域社会への情報発信ともなった。

## 学生等の評価

3年次には、「国際協力ディベート論」、「海外実習」、「国際協力インターンシップ」および「国際協力研修実習」を受講しなくてはならないが、毎週、多くの課題が出され、学生にとっては、大きな負担になっているとの意見もある。一方で、語学力の向上を目指すためには、毎週課題に取り組み、英語での意見の構築を行う訓練も重要なものとなっている。受講中は辛い課題が多くあるものの、終了時には達成感と満足が得られるとの評価が多い。副専攻科目との重複を避けるため、多くの課目が、5講目開講もしくは休業中の集中講義となっている。従って、3年次には、学生への負荷が高いのが現状であるが、内容的な充実から学生の評価は高いと確信している。

## 学外からの評価

本プログラムは国際貢献のためのプログラムであることから、海外での国際協力に関係する専門家を本学に招いての評価委員会を開催した。

平成17年度には、4か国4人（フランス、韓国、マレーシア、日本）の学外委員による、評価会が行われ、本学が目指す国際貢献を担う人材育成のための連携教育による「畜産国際協力ユニット」等の評価を行った。

平成18年度には、6か国6人（フランス、中国、韓国、マレーシア、タイ、ケニア）の学外委員による、評価会を行った。

評価委員会からは、「国際協力の部門における豊富な経験を持つ帯広畜産大学は、既に、アジア、サブサハラアフリカ地域及び中南米を中心に、多くの発展途上国の大学などの機関との交流実績がある。多くの場合、これらの機関との間に取り交わされている連携・交流協定を通じ、更にネットワークを強化する努力が必要で、これらのネットワークを利用して、海外実習や研究・教育拠点の形成にも役立てることが可能となる。2006年度に実施された第1回海外実習では、このような連携協定を有効に利用し、非常に効果的な実習が実施されたと評価される。帯広畜産大学が展開し始めた新たな国際協力に貢献する専門職業人の育成は、日本の国際貢献に大きな役割をはたすことが期待され、現行のシラバス改定の作業の中で、国際協力学の更なる強化が期待される。」との評価を受けた。

## 取組支援期間終了後の展開

本プログラムは平成18年度で終了したが、平成20年度からはそれまでの定員を10人から20人に増員して、学生のニーズ及び社会のニーズに対応することとしている。

また、通常の国内実習に比べて経費がかかるにも関わらず、重点的に配分して更なる実習の充実を図っている。平成19年度は13人の学生を受け入れ、昨年同様に学生にとっては国際協力を考える貴重な実習となった。今後は、活動拠点を東南アジアから広げて、中央アジア、アフリカ、南米も視野にいれ国際協力ができる地域・国を対象にプログラムの充実が必要であり、所属する教員・学生が一体となって、「畜産国際協力ユニット」を盛り上げ、国際貢献を担う人材を輩出できることが今後の課題であり、目標である。

フィリピンの酪農強化プロジェクトも、第4次派遣を行い、現地の酪農家たちからも必要とされており、また、現地酪農家に適した助言ができ、真に国際貢献ができるものと期待されているとともに、責任の重大さを再認識し、より現地の人々に必要なボランティア活動ができるものと思われる。

本件お問合せ先 帯広畜産大学学務課学務係 0155-49-5293

---